第15回韓・中・日徐福文化学術セミナーに参加して

（2016年10月7日開催）

2016.12.21神奈川徐福研究会資料　　**伊藤健二**

1. 韓国済州島と徐福伝説

① 済州島

済州島（チェジュとう、さいしゅうとう）は、朝鮮半島の西南にある火山島で、日本人によく知られている。人口は約 55 万人、面積は 1,845km² で、沖縄本島の 1.5 倍。 地形は標高 1,950m の漢拏山（ハンラサン）を中心とした火山島であるが、溶岩の粘性が低いため、なだらかな盾のような形状をしていることから、楯状火山あるいは盾状火山と言われる。仙山、瀛州（えいしゅう）山と呼ばれた時代があるといい、また金剛山（北朝鮮）、智異山と合わせて、三神山とも称される。

漢拏山（ハンラサン）

参考1　神仙思想

方丈・蓬萊（ほうらい）・瀛州（えいしゆう）など超自然的な楽園と，そこに住む神通力をもった神仙の実在を信じる中国古代の民間思想。この信仰に基づいて不老不死の薬が探索され，養生法が説かれた。道教の中心的教説として取り入れられた。

（以上、三省堂大辞林による）

日本でも古来※、道教・神仙思想の影響を受けており、特に修験道に著しい。また富士山が蓬莱山だとする文献や、新宮の徐福を祀る阿須賀神社の崇拝対象の山が蓬莱山を名乗るなど、「日本の蓬莱山」もいくつかある。

参考1.　司馬遷『史記』秦始皇本紀より

斉人徐市（徐福）が始皇帝に上書して言う。海中に三神山有り、名づけて蓬莱、方丈、瀛州と言う。仙人之に居る。請う、斎戒（神聖な仕事に従う者が飲食や行動を慎み、心身を清めること）して、童男女と共にこれを求むることを得ん、と。これに於いて徐市（徐福）をして童男女数千人を発し、海に入りて仙人を求めしむ。

済州島の最終噴火は１１世紀であり、島の海岸は黒い溶岩の塊が至るところで見られ、独特な風景があり、「済州の火山島と溶岩洞窟群」として世界遺産に登録されている。しかし火山地質であるため、富士山同様に水が土に浸透しやすく、農地には適

黒い溶岩の海岸

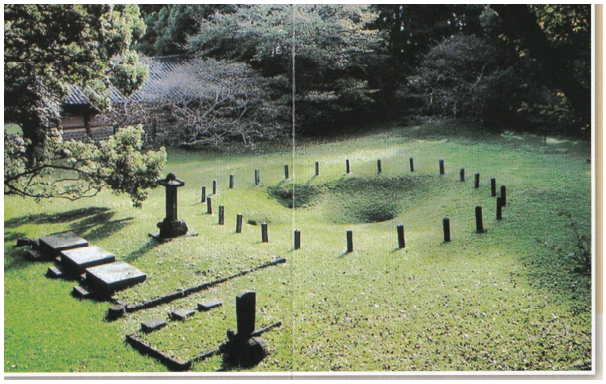
さない。

行政的には、北半分を済州（チェジュ）市、南半分は西帰浦（ソギポ）市の二市で構成されているが、15 世紀初め頃までは耽羅（たんら）という独立した王国だった。その特異は歴史、風景からか、済州島には神話、伝説が有り、徐福伝説もその一つだ。

②済州島の神話

・「三姓神話」

未だ人の住まない太古の濟州に「高、梁、夫」の 3 つの姓を持った 3 人の神人が、漢拏山の北山麓の地の穴（三姓穴）から現れたのが現在の済州の人々の先祖であるという。ある日、漢拏山から遠くの海を眺めていた彼らは、東の方から流れてくる木の箱を発見した。開けてみると、箱の中には東国の碧浪国から来たという紅帯紫衣の使者と美しい 3



三姓穴

三姓穴の寺院での祭礼

人の姫と馬と五穀が入っており、神人は、彼女達を妻として迎え、その後神人の子孫達は、産業と五穀の栽培を始めて集落を作るようになり、約 900 年後に皆の人望を集めた高氏を王として、初めて「タクラ」という王国が成立したとされる。

なお、三姓神話と徐福伝説を結びつけて、東から流れ着いた箱に入っていた 3 人の姫は、徐福が連れてきた童女だと言う人もいる。

・トルハルバン（石じいさん）

もともと朝鮮時代の行政区域である 3 つの郡・県のそれぞれの東・西・南門の入口に立てられた、村の災厄を追い払う守護神（道祖神）であったが、現在は済州島のシンボルとして各地に立てられている。

トルハルバン

③済州島の徐福伝説

（曲玉維著「追随徐福東渡行」を参照し、写真も一部転用しました。）

正房瀑布

西帰市の福渡来伝説地は、海岸にある「正房瀑布」という滝だ。23 メートルの滝が直接海へ落ちている。500 人の童男童女を連れた徐福の一行は、三神山のひとつ瀛州（済州島）の漢拏山に上陸し、自生している不老草「岩高蘭」を捜したという。しかし、結局は見つけられないままこの地を去る時、正房瀑布に心打たれ、絶壁に「徐市過此」という言葉を刻して、惜しみながら西に帰ったといわれ、「西帰浦」という地名は、ここから来たという説もある。済州島の石刻文字は風化して読めなくなったが、刻字を再現した石が展示されている。また韓国南海にも同じような徐福が刻んだとされる石刻が残っている。（写真参照）

大篆書体で、「徐市過此」と書いてある？

韓国南海島の石刻（石の左側）

済州島の徐福伝説は、いつの時代に形成されたのか確認できなかったが、韓国と中国及び日本との古くからの交流があったことが伝説となって残ったのだろう。また、韓国の権武一先生によると、ここの伝承地も、神仙思想が濃厚な場所だということだ。日本の多くの徐福伝承地も、神仙思想を受け継いだ修験道の聖地であり、伊根、新宮、波田須、男鹿、小泊などの山と海が織りなす風景は済州島と似ており、徐福伝説の根は同じなのだろう。

「済州島と徐福伝説」に関しては、別に PDF で準備した、韓国済州徐福文化国際交流協会顧問である権武一（クォン・ムイル）先生の論文を参照してください。これは、2016 年 10 月開催された、富士山徐福国際フォーラムでの論文です。

また、石刻文字に関しては、次ページに曲玉維先生の書から一部抜粋したものを掲載しましたので参照してください。

参考　石刻文字の検討　　（ 曲玉維著「追随徐福東渡行」から抜粋）

韓国の南海郡の人が書いた『「徐市過之」の秘密』の本には、韋滄呉世昌（1864－1953年）氏の考証を引用しているが、内容は以下の通り。

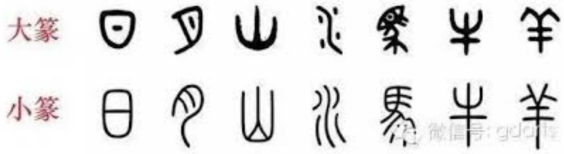
此刻立南海郡锦山，是摩崖刻字。书体奇诡，人莫能解，但传云徐市题名。我先君曾携拓本至燕京（今北京），遍征博古之士，释得'徐市起礼日出'六字，是秦时遗迹，在李斯作篆之前，乃籀文也，间焉东邦石墨之冠。

【訳:この摩崖石刻が南海郡の錦山に立てられている。異様な書体で、誰もその字を解読できなかったが、徐福が書いた刻字として伝えられてきた。私の先祖がその刻字を模写して燕京（今の北京）に持って行き、当時の博識な人を全部訪ねたところ、「徐市起礼日出」の六字と解読でき、これは秦の遺跡であり、李斯（中国秦代の宰相）が小篆（秦の文字）を統一する以前の籀文（西周時代、籀が定めた文字）であり、おそらく東邦の最初の石刻記録であろう。】

また、この石刻文字は「徐市起拝日出」、「徐市起拝」、「徐市過此」、「徐市過之」などの解釈があり、私も石刻の写真を北京のある友達に見せたことがある。彼は「祭日斯本晨」（今朝、太陽を祭った）と説明したが、もちろんこの解釈は信憑性に乏しいと思われる。その他に、ある韓国の学者とインドの帯塞畔戴博士はこれは文字ではなく、「狩場」の記号と解釈し、絵図で狩猟をしていると解析した。韓国の学者の著作では徐福集団と済州島の関係、徐福と西帰浦の関係、徐福の南海島での活動、三神山と漢拏山の関係、漢拏山と瀛州山の関係などを説明し、徐福が三神山を探しているときに、済州島を瀛州山としたと考えた。私もこれはかなり可能性が高く、その後徐福は東海にはまた別の山があるということが分かり、また探しに行ったと思う。最後の渡航（紀元前209年）は、済州島で休養し食糧を補給し、また正房瀑布で飲料水を補給し記念に刻字したと思われる。しかし、正房瀑布は海岸の滝で、海風の蝕むスピードが早い。20世紀50年代に入ると、岩石が風化して脱落し、刻字がすでになくなってしまった。同じく島とはいえ、南海島の錦山の刻石は山の中腹の一年中乾燥した南向きの、海湾を眺めるところにあり、それゆえ保存された。この石刻が刻まれた時は正房石刻の以前だと推測される。

注;大篆、小篆、籀文

「大篆（だいてん）」は西周の宣王の時代、太史・籀（ちゅう）が公式文字・籀文を定めた際に編纂した書物の名であると伝えられ、大篆は籀文そのものの別名であるとされている。小篆は、秦の時代に大篆を受け継ぎ制定された。



なお、大篆の詳細には諸説ある。

（例示と文はホームページから）

2. 第15回韓・中・日徐福文化学術セミナー報告

日時：2016 年 10 月 7 日（金）19:00　歓迎晩餐　　シャングリラ
10 月 8 日（土）10:30　瀛州徐福民族祭　　徐福展示館
13:00　済州徐福芸術団　　西帰浦市カルホテル
セミナー　　〃

主催：(社)済州徐福文化国際交流協会、共同主催：西帰浦市、済州発展研究院

金亨受理事長

張雲方会長

田島会長と銭強理事

出席者：

中国	張雲方	中国徐福会会長
	張良群	中国徐福会顧問
	金丹実	韓中日通訳
	曲玉維	中国徐福研究会秘書長、龍口市徐福研究会秘書長
	周一云	連雲港徐福研究所長
	銭　強	連雲港図書館長、連雲港徐福研究会理事
	王文初	蘇州徐福会　学術委員会主任
	成聡栄	連雲港文化広電体育局部長
韓国	金亨受	(社)済州徐福文化国際交流協会理事長
	李京煥	地域文化観光研究所代表
	権武一	(社)済州徐福文化国際交流協会顧問、小説家
	朴在権	済州特別自治道　西部農業技術センター長
	金世中	(株)世林代表
	洪琦杓	済州道文化財委員
	宗淳玄	精神世界院代表
	李英根	済州徐福協会前会長
	蔡彼多	古代海洋探検研究所代表
	李世基	韓国徐福会長　韓中親善協会長
	金龍国	韓中親善協会事務総長
日本	田島孝子	日本徐福協会会長
	逵　志保	愛知県立大学講師　日本徐福協会顧問
	仮谷憲一	熊野市観光スポーツ交流課係長
	本間修二	メデイアプロジューサー
	伊藤健二	神奈川徐福研究会事務局長　日本徐福協会事務局長

①. 基調講演　「徐福文化研究が力強く発展している」　　張雲方　中国徐福会会長

②. 論文発表　（論文の内、特に日本と関係が深い洪琦杓氏と逵志保氏のものについては、別に PDF で準備しました。）

- 「不老草」と長寿文化産業　張良群
- 徐福と航海の歴史　権武一
- 韓国文献所載「徐福記録」の研究　洪琦杓
- 徐福の濡れ衣を晴らして真実で偉大な徐福を還元させよう　曲玉維
- 徐福の不老草を通して見た地方活性化方案　金世中
- 不老長生、海洋シルクロードと Ecoppia　Adventure　Park　蔡彼多
- 済州薬用資源作物相及び主要薬用作物の栽培情況　朴在権
- 非物質文化遺産と徐福伝説　逵志保

③. 討論会

学術セミナー討論会

左から、張良群、洪琦杓、金世中、朴在権、金亨受、蔡彼多、逵志保、権武一、曲玉維の各氏

←　中日韓語通訳　金丹実さん
中国人であるが、日本語、韓国語も母国語のように使いこなす。中国各地の徐福フォーラムでも、彼女が同時通訳を行っているがその能力には驚かされる。

3. 徐福公園

徐福公園は、韓国七大文化観光地に指定され、2003 年 9 月、一般に公開された。

ここには、徐福展示館、龍口市から贈られた徐福像、秦皇島市から贈られた徐福東渡像、温家宝元総理が書いた「徐福公園」の四字が刻まれた石碑等がある。

徐福展示館

セミナーに先立ち、徐福公園の徐福展示館で、瀛州山神を祀る「瀛州徐福民俗祭」が行われた。徐福展示館は、内部は展示場であるが、建物は寺院風であり、入り口に徐福を祀る祭壇がある。「瀛州徐福民俗祭」は、2200 年前の徐福が不老草を見つけるために瀛州山（えいしゆうさん＝現在の済州島最高峰の漢拏山（ハンラサン））に登る前に行った祭祀を再現したもの。

瀛州徐福民俗祭

徐福や、将軍、司祭に扮した済州徐

福文化国際交流協会の金会長を初めとする幹部が、祭事を執り行い、我々も瀛州山神に韓国の儀礼に従い四拝した。

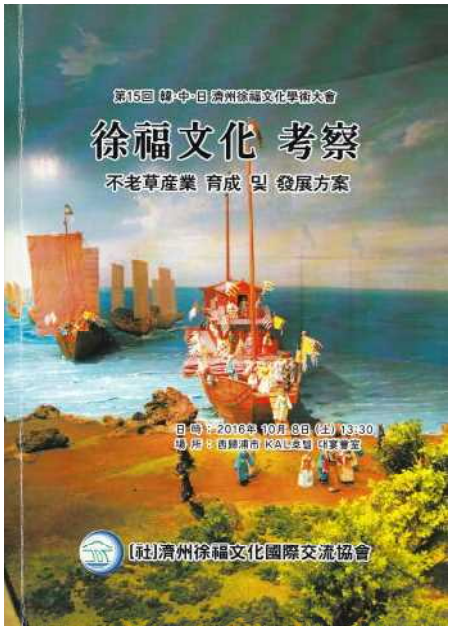
日本の佐賀、新宮、富士山等の徐福関連の像などが紹介されている。

石碑の「徐福公園」の四文字は、中国総理温家宝が書いたもので、2007 年中国山東省政府から贈られた。

4. 終わりに

①韓国の徐福研究

今回の学術セミナーに参加して感じたのは、韓国の徐福研究の多様さだ。今まで私は、韓国の徐福研究者というと、日本語を流暢に話す元済州徐福文化国際交流協会理事長の禹珪日さんしか知らなかった。しかし、実際は韓国の徐福研究も多くの人が多様な研究を行っている。特に今回の研究発表で注目したいのは、洪琦杓氏の「韓国文献所載「徐福記録」の研究」だ。韓国の各時代の文献を丹念に調査しているが、特に１４世紀から１９世紀にかけて日本を訪問した１８人の韓国人の記録を調査している。徐福研究というと、徐福がどこに行ったなど、徐福の行動を探るものが多いが、このように地道に文献を研究する事が大切と感じた。特にこの研究は、日本の徐福伝説と関係してくるので、日本の徐福研究者にとっても役立つだろう。



論文集は、３カ国語で厚さ３ｃｍ

②済州島の徐福研究組織

今回のセミナーを主催した社団法人済州徐福文化交流協会は、昨年済州島内の二つの組織を統合し、元西帰浦市長の金亨受理事長の下で組織を強化したようだ。今回のセミナーで感じたのは、我々客人に対する対応の丁寧さだ。論文は全て３か国語に翻訳され、飛行場からは通訳付きでの送り迎え、セミナーでの個人個人への通訳の配置などの気配りがあった。

③済州一人旅

私のセミナー参加を決めたのが遅く、セミナー翌日の直行便がとれなかったので、結局済州市内に２泊ホテルを予約し、済州市内を一人で観光した。私はハングルは全く分からないので、一人歩きは不安があったが、済州島には大勢の中国人観光客が来ており、飲食店でもメニューに漢字の表記があるところもあって、なんとか生活ができた。

済州市内では、観光用の乗り降り自由な循環バスが一時間毎に走っており、これを利用した。日本語を含む４か国語の観光案内オーデイオが選択できる。添乗のバスガイドは皆流暢に中国を話すので、中国語がわかると更に便利だ。

二日目は飛行機が夕方なので、昼間自分で市内を歩いたが、海岸の奇岩、庶民の市場、孔子廟など、済州島の自然と文化の発見が多くあった。

市内循環観光バス